

すずむし

第17卷・第2号

(通卷102号)

1968年4月

倉敷昆虫同好会

目 次

大野正男：隠岐諸島のハムシ類(3)	33
水野弘造：屋久島天牛採集行失敗の記	39
山砥司朗：岡山県産テントウムシの採集記録	47
松野 宏：石の下の四年目・高山蝶の周年経過についての推測	48

おとしふみ

木村基樹：西大寺市内でコウチスズメを探集	47
山砥司朗：備中産甲虫雑記 (2)	51
竹内幸夫：オオヒラタハナムグリの新産地	51
水野弘造：Maddester 雜言録 (7)	52

隠岐諸島のハムシ類 (3)

大野正男

(東洋大学生物学研究室)

The Chrysomelid-Beetles from the Oki Islands (3)

Masao Ohno

隠岐諸島のハムシについて、筆者は1964年7月の調査資料を中心に、総数91種を記録、そのハムシ相についても総括的見解を述べておいた。しかし、その後、島根県庁農業改良課の門脇久志、市川学園の山崎秀雄、東京農大育種学研究所の前波鉄也の諸氏から、それぞれ隠岐での採集品を恵与され、隠岐諸島から未記録の種類や、今まで全く記録のなかつた知夫里島の資料を見ることができたので、ここに、追加報告の形で、それらの採集品を記録しておきたいと思う。

なお、前報発表の際、筆者は、門脇(1958)、近木(1965)の2文献を見落した。門脇の報告には *Plateumaris sericea*, *Oulema oryzae*, *Cryptocephalus scitulus*, *Cr. sexpunctatus*, *Chrysomela vigintipunctata*, *Aulacophora femoralis*, *Paridea angulicollis* の7種が、また、近木の報告には *Donacia provosti*, *Cryptocephalus sexpunctatus*, *Cr. scitulus*, *Chrysomela vigintipunctata*, *Paridea angulicollis*, *Plateumaris nipponensis* の6種が記録されている。近木の報告した隠岐のハムシは、大部分、門脇の報告から引用したもののように思われるが、*Donacia provosti* と *Plateumaris nipponensis*だけは門脇の報告に見られないものである。ただし、*Plateumaris nipponensis*の方は、門脇が“スゲハムシ *Plateumaris sericea*”の名で記録したのを、近木が、原色昆虫大図鑑II(甲虫篇)に出ている“スゲハムシ *Plateumaris nipponensis*”によって、学名の部分だけ変更して再録したようにも思われる。しかし、いずれにせよ、これら2文献中には筆者の前報に収録しなかった種類が見られるので、今回の報告を発表するに当り、とりあえず未収録種だけ目録中に収録することにした。

本稿を草するに当り、貴重な資料を心よく提供下された上記の諸氏、並びに、島根県の昆虫に関する多数の文献をご恵送下された島根農大の近木英哉氏に対し、この機会を通じ改めて厚くお礼申し上げる次第である。

1. 目 錄

目録には、学名・採集地名・採集個体数・採集年月日・採集者名を列記した。

採集地の中、西郷、名田、八田、有木、布施、元屋、大満寺山、五箇、都万の各地は島後にあり、焼火山は西ノ島にある。知夫里島は詳しい産地は示さず島名だけで表わした。

隠岐諸島全体を通じ、今回新しく記録される種には、和名の後に*印を附記した。

Donaciinae ネクイハムシ亜科

1. *Donacia provosti* FAIRMAIRE イネネクイハムシ
八田 (1ex., 28. VII. 67, 門脇), 隠岐 (近木 1965).
2. *Plateumaris nippensis* NAKANE スゲネクイハムシ
隠岐 (門脇 1958 *Plateumaris sericea* として; 近木 1965).
ここでは近木の *nippensis* と門脇の *sericea* を, とりあえず同一物と見なし,
nippensis の名を採用しておいたが, この処置が適切であるか, どうかには自信がない。
いずれ, 隠岐で採集された確実な標本を調査する機会を得た上で, この問題を解決
したいと考えている。

Criocerinae クビナガハムシ亜科

3. *Lema adamsii* BALY キベリクビボソハムシ*
大満寺山 (1ex., 29. VII. 66, 山崎), 都万 (1ex., 20. VIII. 67, 門脇).
4. *Lema honorata* BALY ヤマイモクビボソハムシ
布施 (2exs., 25. VII. 67, 門脇), 元屋 (1ex., 24. VII. 67, 門脇).
5. *Lilioceris subpolita* (MOTSCHULSKY) アカツヤクビナガハムシ*
大満寺山 (1ex., 26. VII. 66, 山崎).
6. *Oulema oryzae* (KUWAYAMA) イネクビボソハムシ
有木 (1ex., 23. VII. 67, 門脇).

Clyrinae ナガツツハムシ亜科

7. *Smaragdina aurita* (LINNE) キボシナガツツハムシ*
西ノ島 (7exs., 6. VII. 67, 門脇).

Cryptocephalinae ツツハムシ亜科

8. *Cryptocephalus approximatus* BALY バラルリツツハムシ
西郷 (1ex., 4. V. 67, 門脇), 都万 (1ex., 5. V. 67, 門脇).
9. *Cryptocephalus fortunatus* BALY キアシルリツツハムシ
西郷 (2exs., 30. V. 67, 前波).

Synetinae ホゾハムシ亜科

10. *Syneta adamsi* BALY カバノキハムシ*
都万 (1ex., 5. V. 67, 門脇).

Lamprosomatinae ツヤハムシ亜科

11. *Oomorphoides cupreatus* (BALY) ツヤハムシ
西郷 (11exs., 4. V. 67, 門脇), 西ノ島 (2exs., 6. V. 67, 門脇).
12. *Oomorphoides nigrocoeruleus* (BALY) オオツヤハムシ
西郷 (3exs., 4. V. 67, 門脇), 都万 (3exs., 5. V. 67, 門脇), 西ノ島 (2exs.,
6. V. 67, 門脇).

13. *Oomorphus japonicus* JACOBY ヒメツヤハムシ
知夫里島 (4 exs., 3. V. 67, 門脇).

Eumolpinae サルハムシ亜科

14. *Acrothinium gaschkevitschii* MOTSCHULSKY アカガネサルハムシ
大満寺山 (2 exs., 26. VII. 66, 山崎).
 15. *Basilepta fulvipes* (MOTSCHULSKY) アオバネサルハムシ
有木 (2 exs., 23. VII. 67, 門脇).
 15. *Basilepta fulvipes* f. *atrides* (MOTSCHULSKY)
布施 (2 exs., 25. VII. 67, 門脇).
 16. *Colposcelis signata* (MOTSCHULSKY) ヒメキバネサルハムシ
西郷 (2 exs., 30. V. 67, 前波).

Chrysomelinae ハムシ亜科

17. *Chrysolina aurichalcea collaris* WEISE ヨモギハムシ
西郷 (9 exs., 30. V. 67, 前波).
 18. *Chrysomela vigintipunctata costella* (MARSEUL) ヤナギハムシ
西郷 (1 ex., 30. V. 67, 前波), 知夫里島 (2 exs., 3. V. 67, 門脇).
 19. *Plagioderma versicolora distincta* BALY ヤナギルリハムシ
西郷 (1 ex., 4. V. 67, 門脇), 布施 (7 exs., 25. VII. 67, 門脇).

Galerucinae ヒゲナガハムシ亜科

20. *Aulacophora femoralis* (MOTSCHULSKY) ウリハムシ
西郷 (2 exs., 30. V. 67, 前波).
 21. *Aulacophora nigripennis nigripennis* MOTSCHULSKY クロウリハムシ
布施 (2 exs., 25. VII. 67, 門脇), 燐火山 (1 ex., 23. VII. 67, 山崎), 西ノ島
(4 exs., 6. V. 67, 門脇).
 22. *Exosoma akkoae* (CHŪJŌ) ヒメリリヒメハムシ
大満寺山 (1 ex., 25. VII. 67, 門脇), 布施 (6 exs., 25. VII. 67, 門脇).
 23. *Exosoma flaviventre* (MOTSCHULSKY) キバラヒメハムシ
大満寺山 (2 exs., 26. VII. 66, 山崎; 2 exs., 31. V. 67, 前波), 布施 (6 exs.,
25. VII. 67, 門脇).
 24. *Fleutiauxia armata* (BALY) クワハムシ
西郷 (3 exs., 30. V. 67, 前波; 15 exs., 4. V. 67, 門脇), 都万 (5 exs., 5. V.
67, 門脇), 西ノ島 (13 exs., 6. V. 67, 門脇), 知夫里島 (5 exs., 3. V. 67, 門脇).
 25. *Galerucella maculicollis* (MOTSCHULSKY) ニレハムシ
知夫里島 (1 ex., 3. V. 67, 門脇).
 26. *Paridea angulicollis* (MOTSCHULSKY) アトボシハムシ
西郷 (1 ex., 30. V. 67, 前波).

27. *Pyrrhalta humeralis* (CHEN) サンゴジュハムシ
焼火山 (1 ex., 23. VII. 66, 山崎).
 28. *Tricholochmaea semifulva* (JACOBY) サクラケブカハムシ*
都万 (1 ex., 5. V. 67, 門脇).

Alticinae ノミハムシ亜科

29. *Altica caerulescens* (BALY) ヒメカミナリハムシ
五箇 (1 ex., 29—30. V. 67, 前波), 西郷 (1 ex., 30. V. 67, 前波).
 30. *Altica cirsicola* OHNO アザミカミナリハムシ*
布施 (4 exs., 25. VII. 67, 門脇).
 31. *Altica himalayensis japonica* OHNO キタカミナリハムシ
名田 (2 exs., 18. VII. 67, 門脇).
 32. *Altica oleracea* (LINNE) ホソカミナリハムシ
布施 (5 exs., 25. VII. 67, 門脇).
 33. *Altica viridicyanea* (BALY) コカミナリハムシ
知夫里島 (1 ex., 3. V. 67, 門脇).
 34. *Aphthona perminuta* BALY ツブノミハムシ
布施 (2 exs., 25. VII. 67, 門脇), 西郷 (13 exs., 4. V. 67, 門脇), 西ノ島 (13 exs., 6. V. 67, 門脇).
 35. *Aphthona strigosa* BALY サメハダツブノミハムシ
大満寺山 (2 exs., 26. VII. 66, 山崎; 4 exs., 19. VII. 67, 門脇), 西郷 (14 exs., 4. V. 67, 門脇).
 36. *Aphthonaltica angustata* (BALY) ニセカミナリハムシ*
都万 (4 exs., 5. V. 67, 門脇), 西ノ島 (4 exs., 6. V. 67, 門脇).
 37. *Argopus clypeatus* BALY センニンソウマルノミハムシ¹⁾
大満寺山 (1 ex., 31. V. 67, 前波), 西郷 (4 exs., 4. V. 67, 門脇), 西ノ島 (1 ex., 6. V. 67, 門脇).
 38. *Argopus punctipennis* (MOTSCHULSKY) キイロマルノミハムシ
西郷 (1 ex., 4. V. 67, 門脇).
 39. *Chaetocnema discreta* (BALY) キイチゴトビハムシ
布施 (1 ex., 25. VII. 67, 門脇).
 40. *Longitarsus nitidus* JACOBY オオヒルガオトビハムシ
布施 (1 ex., 25. VII. 67, 門脇).

¹⁾ 前報では *Argopus nigritarsis* の名で記録したが, *clypeatus* とするのが正しい。

41. *Luperomorpha pryeri* (BALY) サンショウノミハムシ
焼火山 (2 exs., 23. VII. 66, 山崎).
42. *Nonarthra cyaneum* BALY ルリマルノミハムシ
大満寺山 (1 ex., 26. VII. 66, 山崎; 1 ex., 19. VII. 67, 門脇), 西郷 (13 exs., 4. V. 67, 門脇), 都万 (15 exs., 5. V. 67, 門脇), 西ノ島 (2 exs., 6. V. 67, 門脇), 知夫里島 (1 ex., 3. V. 67, 門脇).
43. *Sangariola punctatostriata* (MOTSCHULSKY) カタクリハムシ
西郷 (2 exs., 4. V. 67, 門脇), 都万 (3 exs., 5. V. 67, 門脇).
44. *Sphaeroderma balyi* JACOBY フキタマノミハムシ
焼火山 (7 exs., 23. VII. 66, 山崎), 西ノ島 (5 exs., 6. V. 67, 門脇).

Cassidinae カメノコハムシ亜科

45. *Cassida fuscorufa* MOTSCHULSKY ヨモギカメノコハムシ
西郷 (1 ex., 30. V. 67, 前波).
46. *Cassida japonica* BALY イノコヅチカメノコハムシ
有木 (1 ex., 23. VII. 67, 門脇).

II. 附 記

ここに記録した隠岐のハムシは、全体で46種となった。それらの中、*Donacia provosti*, *Plateumaris nipponensis*, *Lema adamsi*, *Lilioceris subpolita*, *Smaragdina aurita*, *Syneta adamsi*, *Tricholochmaea semifulva*, *Aphthonaltica angustata*, *Altica cirsicola*, *Sangariola punctatostriata* の10種は前回までの報告に含まれていない。これらのほとんどが、隠岐から新しく記録されるハムシであるが、*Donacia provosti* と、標本はみていながら *Plateumaris nipponensis* との2種は、前述の如く、既に門脇 (1958) 近木 (1965) により、隠岐から記録されており、ただ、筆者がこれらの文献を見落していたために、前報に入れられなかったものである。

以上のように、今回、新たに10種のハムシが前報に追加されることになるが、これらのハムシは、*Donacia provosti*, *Plateumaris nipponensis* を含めて、隠岐の食草環境より考え、いずれも隠岐に分布しているであろうことが、筆者により推定されていた種類である。

また、前報において、記録にはありながら、筆者に確認できなかった種類をいくつか挙げておいたが、それらの中、*Cryptocephalus approximatus*, *Chrysomela vigintipunctata costella*, *Fleutiauxia armata*, *Sangariola punctatostriata* の4種は今回の資料中に見出され、これらが隠岐に分布することが再確認された。特に、*Linaeidea aenea* の記録と共に誤記録ではないかと推定しておいた *Chrysomela vigintipunctata* が得られたことは喜ばしい。前報における本種に関する筆者の見解は、この際訂正しておく

ことにする。

今回得られたハムシの中で、隠岐のハムシ相を特徴づけるものとして、次の2種を挙げることができる。

1. *Lema adamsii* BALY キベリクビボソハムシ

今回隠岐で得られたこのハムシは、各翅鞘に2つの黒紋をもつ4紋型であったが、このような型は、東海から伊豆諸島にかけて特に多く見られるので、隠岐の本種が、2頭ともそのような個体で占められている点は興味深い。更に採集個体数をふやして、隠岐における本種の変異傾向を調べてみたいものである。

2. *Chrysolina aurichalcea collaris* WEISE ヨモギハムシ

本種にはアオグロ型とドウガネ型の2型があり、日本海地方ないし日本海指数の大きい地方には、特にアオグロ型の多いことが指摘されている。前報では、採集個体数が少ないため、隠岐のヨモギハムシについて、この点の言及ができなかったが、今回、前波氏の採集された9頭の個体をみると、これらは全部アオグロ型で、やはり上記の一般傾向を裏づけていた。

III. 文 献

(前報印刷後に発表されたもの、および前報で見落したものだけを挙げる。)

- 1) 近木英哉 (1965) : 島根県の昆虫目録 V. 鞘翅目 (ハムシ科), 島根農大研究報告, 14(A), pp. 40~44.
- 2) 門脇久志 (1958) : 隠岐昆虫目録 1, ref. pp. 4~5. (トウシャ刷)
- 3) 上田常一 (1965) : 隠岐の動物, pp. 1~172 (園山書店).
- 4) 大野正男 (1966) : 隠岐諸島のハムシ類 (I), 自然科学と博物館, 33 (3-4), pp. 50~60.
- 5) ———— (1966) : 隠岐諸島のハムシ類 (II), 自然科学と博物館, 33 (5-6), pp. 78~87.
- 6) Ohno, M. (1967) : A revision of *Argopus*-species occurring in Japan, Journ. Toyo Univ. Gen. Educ. (Nat. Sci.), 7, pp. 35~51.
- 7) 大野正男 (1967) : 日本産ハムシ科研究の手引 (1), 昆虫と自然, 2 (3), pp. 14~18

屋久島天牛採集行失敗の記

(1967年7月21～31日)

水野弘造

〔序〕

何しろ休暇は長くないのでから有効に使うために飛行機に乗って金はかけてもその代りに虫だけはうんざりする程探って来るんだと意気込みだけはものすごく島に乘込んだのであるが、台風の歓迎に会って名物の雨には充分過ぎる洗礼を受け、あまつさえ南国の強い日射には平常を冷暖房完備の会社生活に馴れてもやしの如くひ弱になった身体の耐え難く慄胆たる敗退感を味わった屋久島行であった。それにしても素晴らしい島であった。独身最後の遠征と決心しての採集行であったが、たとえ将来いかに困難であろうと必ずもう一度の思いをさせずにおかない魅力を秘めた島、これはやはり大した島である。

最小の努力で最大の収穫をとむシの良いことを考えて経験者には根掘り葉掘り尋ねていかかるカミキリのどこでどうして採れるかに至るまで聞いて行ったのであるが、如何せん台風の来襲までは計算に入れてなかったために、40日間一度も雨の降らなかった前年の話とは全く様子が違っており、しかも交通事情がひどく変化していたため当初の予定を大幅に変更せざるを得ず、ずい分とまとったことも多かった。

採集品の報告だけではあまりに簡単に過ぎるので諸般の事情をも少しく付記させていただこう。

〔日誌〕

7月21日（雨）宮ノ浦着

鹿児島港発 8:00 (折田丸) —— 15:00 屋久島宮ノ浦着、永迫旅館泊。

宮林署宮ノ浦担当区事務所にて伐採状況、道路交通事情などを聞く。造林小屋への宿泊は拒絶された。

7月22日（晴）宮ノ浦谷伐採現場で採集。

8:00 出発 —— 12:00 鹿児島港 —— (トラックに便乗) —— 13:00 伐採現場着 (港より約14Km) 採集 17:00 宮ノ浦町着 18:00

7月23日（暴一時雨・風）伐採現場採集。

7:00 出発 —— (トラック便乗) —— 9:00 伐採現場着、採集、風雨のため 13:00 下山 16:00 宮ノ浦町着。

7月24日（雨・台風10号）

午前中バスにて安房へ。ユースホステル泊。宮林署にて小杉谷宿舎の宿泊を頼んだが拒絶される。トロッコの利用もだめ。台風で採集不可能のためバスで海岸見物。安房 10:20 ベス栗生 12:00 (昼食) 13:00 ベス 安房 15:00.

7月25日（雨・台風10号）

〔すずむし、第17巻、第2号、39～46頁、1958年4月〕

安房ユースホステル内に一日中閉じこめられる。

7月26日（昼）海岸線を探集。（山は雨）

安房 10.20 バス 湯泊 11.30 約 1.5 hr 採集。湯泊 13.30 バス 平内 13.40 約 3 hr 採集。平内 17.00 バス 安房 18.30 着。

7月27日（雨）小杉谷へ徒歩遍行。

安房 8.00 出発 — 小杉谷部落 12.00 — 小杉谷荘 13.00 着。小杉谷荘泊。日没前30分間晴れ間があり訪花甲虫類を探集。

7月28日（雨）宮ノ浦岳登山。

小杉谷荘 5.00 出発 — ウィルソン株 6.30 (朝食) 6.45 — 大王杉 7.15 — 高塚山分岐点 9.00 — 永田岳分れ 10.30 — 宮ノ浦岳頂上 11.00 — 花の江河 12.40 (昼食) 13.00 — 石塚部落 16.30 — 小杉谷荘 17.30 帰着。

7月29日（雨）

雨のため一日中閉じこめられる。

7月30日（雨～晴）下山、海岸探集。

7.30 小杉谷荘出発 — 安房 12.00 着。安房 13.30 バス 小島 14.30 着。2.5 hr 採集。小島 17.20 バス 安房 18.20 着。22.00 迄安房町内の街灯で採集。ユースホステル泊。

7月31日（晴）帰路。

安房 10.50 バス 屋久島空港 11.20 着。11.40 発東亜航空機 12.30 鹿児島着。鹿児島 13.30 発全日空機 15.30 大阪空港着。

〔宿〕

海岸の部落には旅館があるが山に入ると宿に困る。小杉谷には町営の小杉谷荘というのがあり安く泊れるが原則として自炊である。宮ノ浦の谷には営林署の造林小屋があるのみで、予約しておかないと泊めてくれない。現地交渉ではまずだめである。安房にはユースホステルがあり1日800円弱。宮ノ浦の旅館は1口約1,100円。

〔交通〕

鹿児島港と屋久島を結ぶ船会社が3つあるが、毎日全部揃っているのではなく交代である。飛行機は1日1往復。

島内海岸線を回る道路をバスが通り1日数往復。安房が起点。

山に入るにはトラックか営林署のバスに便乗するほかはタクシーを頼むか徒步を覚悟しなければならない。安房から小杉谷へはトロッコが入っていて1966年には一般客も乗せていたらしが1967年は団体貸切以外は乗車させなかった。林業用トロッコには絶対に乗せてくれない。

〔山・植物〕

屋久島の地図で明らかに海岸からいきなり急勾配で高山が生えているので植物分布は特異で登山すると垂直分布の変化が素人にもよく分る。色とりどりの熱帯魚が多数遊泳する海岸にはガジュマル、アコウ、バナナなどの熱帯植物が見られ、シイ、クスなどの

暖帯林を経て有名な屋久杉帶に入り、山頂部はシャクナゲ、ササ帶となっている。山頂には雨中登山したので夏とはいえ立止ると寒く、海岸の強烈な日射下に息も絶えだえに叩網をやっていた島と同じ島の中に居るという実感がどうしても湧かない。九州第1の高峰宮ノ浦岳は標高1935m、海岸波うちぎわから登るので実質登高距離は中部山岳の山々よりも更に大きいと言わねばならない。屋久杉の原生林は根廻り 20~40m 推定樹齢 3,000~5,000年 など化物のような杉のシャングル、これが海上ちっぽけな島の中とはとても思えない。シャクナゲ帶のあたりに有名な花の江河という湿原があるが期待した程の景色ではなかった。春あやめの開花期は美しいそうである。屋久島の山は大部分が国有林だそうであるがここでも御他聞にもれず伐採ブームである。東京オリンピック、大阪万博などのため最近は特に伐採量が多くなったそうで、原生林が次々と急スピードで姿を消しているのは何とも情ない限りである。海岸に沿う地域でも10年前までは原生林が多かったが、最近では数キロも川を逆行しないと見られなくなったそうで、わずかに原生状態で残っているのは神社の境内だけという近畿地方と全く同じ状況に近づきつつある。

〔昆虫〕

植物と対応して昆虫も海岸では熱帯系、山岳部では温帯系のものが採れ、小さな島としては種類が極めて豊富であるらしい。しかし個体数は必ずしも多くない。私は天牛を目標として出かけたので蝶の採集は全く副業だったが、ツマベニチョウ、アマミウラナミシジミ、リュウキュウムラサキなど熱帯系の蝶が初めての目にはやはりもの珍らしかった。肝じんの天牛はコゲチャヒラタ、ヤクシマヨスジハナ、ヤクシマミドリ、ヤクシマコブヤハズという4特産種のうち少くとも2種を探るつもりが峰の1頭も採れず完全な敗退であった。それでもヒイロハナ、タキグチモモブトホソ、リョウウブヒメコバネなどは他地では得にくい種であり、ウスフタモンサビ、コゲチャサビ、ペーツヒラタなどの南方系天牛も初めての採集はさすがに悪い気がしないものであった。トンボでは有名なミナミヤンマが多数飛んでいたが極めて採り難く、やっと1ルネットにしたのみ。チビサナエは少なかったがヤクシマトゲオトンボは多数見られた。これらは後日井上清氏に献呈したところ氏はズイ喜の涙を流して感謝された。

採集家は蝶屋さんが圧倒的に多く40~60人の小杉谷荘宿泊者の半数までがネット持ちであったのには驚いた。目標は10人が10人共ヤクシマミドリシジミだそうで、これは非常に採り難い由。トンボ屋さんに2人会った位で甲虫界には会わなかった。私の滞在期間中同志社大学の生物クラブ員が多数、採集していて、小杉谷でも海岸でも彼らに出会った。

〔天候〕

どの案内書にも雨の多いことが必ず書かれており“1ヶ月に35日雨が降る”などの言葉が引用されているが、確かによく降られた。しかし私の滞在期間中には小型の台風10号が島の周囲に停滯したため特にひどかったものと考えられる。海岸ではそれほど多いわけではないらしく、山岳部が雲に隠れ降られているときもよく晴れていることがあり、日射はきついのでカラカラに干からびている。海岸を一日採集しただけで真黒になり、鼻の頭の皮が一枚むけてしまった位である。海岸と山との採集日程をうまく組めば雨をあまり気

にすることはないと思われる。

〔費用〕

10日間で総計約4万円、うち3万円が往復飛行機を含む交通費。

— 採集品目録 —

〔カミキリ〕

1. *Euryptoda batesi* GAHAN ベーツヒラタカミキリ
5 exs., 30. VII, 安房(燈火).
2. *Caraphia lepturooides* MATSUSHITA ケブトハナカミキリ
2 exs., 28. VII, 小杉谷(花上).
3. *Leptura arcuata tsumagurohana* OHBAYASHI ツマグロハナカミキリ
1 exs., 28. VII, 小杉谷(花上).
4. *Leptura ochraceofasciata yokoyamai* HAYASHI ヨツスジハナカミキリ 屋久島亞種
7 exs., 22~23. VII, 宮ノ浦(伐木上); many exs., 27~28. VII, 小杉谷(花上).
5. *Leptura regalis* BATES オオヨツスジハナカミキリ
1 ex., 28. VII, 小杉谷(花上).
6. *Leptura vicaria* BATES フタスジハナカミキリ
1 ex., 22. VII, 宮ノ浦(伐木上); 2 exs., 27. VII, 小杉谷(花上).
7. *Ephies japonicus* NAKANE et OHBAYASHI ヒイロハナカミキリ
1 ex., 27. VII, 小杉谷(花上).
8. *Epania shikokensis* OHBAYASHI リョウブヒメコバネカミキリ
3 exs., 22. VII, 宮ノ浦(伐木上).
9. *Chlorophorus muscosus* BATES フタオビミドリトラカミキリ
3 exs., 22. VII, 宮ノ浦(伐木上); many exs., 27~28. VII, 小杉谷(花上).
10. *Chlorophorus quinquefasciatus* CASTELNAU et GORY ヨツスジトラカミキリ
3 exs., 22~23. VII, 宮ノ浦(伐木上).
11. *Cleomenes takiguchii* OHBAYASHI タキグチモモブトホソカミキリ
2 exs., 27. VII, 小杉谷(花上).
12. *Mesosa longipennis* BATES ナガゴマフカミキリ
1 ex., 23. VII, 宮ノ浦(伐木上); 7 exs., 26. VII, 平内(叩網);
2 exs., 30. VII, 小島(叩網).
13. *Mesosa hirsuta* BATES カタシロゴマフカミキリ
1 ex., 23. VII, 宮ノ浦(伐木上).

14. *Sybra ordinata* BATES アヤモンチビカミキリ
5exs., 26. VII, 平内・湯泊(叩網); 3 exs., 30. VII, 小島(叩網).
15. *Ropica formosana* BATES ウスフタモンサビカミキリ
7 exs., 22. VII, 宮ノ浦(叩網); 5 exs., 26. VII, 平内・湯泊(叩網);
1 ex., 30. VII, 小島(叩網).
16. *Cleptometopus bimaculatus* BATES ハスオビヒゲナガカミキリ
1 ex., 22. VII, 宮ノ浦(叩網).
17. *Pterolophia annulata* CHEVROLAT ワモンサビカミキリ
1 ex., 26. VII, 平内(叩網).
18. *Psacothea hilaris insularis* HAYASHI キボシカミキリ 屋久島亞種
1 ex., 22. VII, 宮ノ浦(飛翔中); 4 exs., 26. VII, 平内(飛翔中).
19. *Acalolepta fraudator* BATES ピロウドカミキリ
1 ex., 23. VII, 宮ノ浦(伐木上); 1 ex., 26. VII, 湯泊(叩網);
1 ex., 30. VII, 小島(叩網).
20. *Acalolepta sejuncta hamai* HAYASHI ニセピロウドカミキリ 屋久島亞種
1 ex., 28. VII, 小杉谷.
21. *Monochamus fascioguttatus humageinsularis* HAYASHI
ホシオビヒゲナガカミキリ 屋久島亞種
3 exs., 22~23. VII, 宮ノ浦(枯枝上); 3 exs., 28. VII, 小杉谷(伐木上).
22. *Palimna liturata* BATES ヒゲナガゴマフカミキリ
3 exs., 22. VII, 宮ノ浦(伐木上).
23. *Sophronica obrioides* BATES イボタサビカミキリ
2 exs., 26. VII, 平内・湯泊(叩網); 1 ex., 30. VII, 小島(叩網).
24. *Mimectatina meridiana* MATSUSHITA コゲチャサビカミキリ
2 exs., 26. VII, 湯泊(叩網); 5 exs., 30. VII, 小島(叩網).
25. *Rhodopina lewisi* BATES セミスジコブヒゲカミキリ
2 exs., 22~23. VII, 宮ノ浦(叩網).
26. *Euseboides matsudai* GRESSITT オビレカミキリ
3 exs., 26. VII, 平内・湯泊(叩網).
27. *Glenea relicta* PASCOE シラホシカミキリ
2 exs., 28. VII, 小杉谷(飛翔中).

〔コメツキ〕

1. *Agrypnus binodulus binodulus* MOTSCHULSKY サビキコリ
1ex., 26. VII. 1967, 湯泊.
2. *Alaus putridus pini* LEWIS フタモンウバタマコメツキ
2 exs., 22. VII. 1967, 宮ノ浦.

3. **Stenagostus umbratilis* LEWIS オオツヤハダコメツキ
2 exs., 29. VII. 1967, 小杉谷.
4. *Harminathous nakanei* KISHII フトチャツヤハダコメツキ
2 exs., 22. VII. 1967, 宮ノ浦.
5. *Hemicrepidius secessus secessus* CANDÈZE クロツヤハダコメツキ
2 exs., 22~23. VII. 1967, 宮ノ浦; 4 exs., 27~29. VII. 1967, 小杉谷.
1 ex., 30. VII. 1967, 小島.
6. *Ganoxanthus pallidus* LEWIS ホソキコメツキ
1 ex., 23. VII. 1967, 宮ノ浦; 1 ex., 28. VII. 1967, 小杉谷.
7. *Ampedus hypogastricus* CANDÈZE アカハラクロコメツキ
3 exs., 27~29. VII. 1967, 小杉谷.
8. **Ampedus optabilis* LEWIS オオアカコメツキ
1 ex., 28. VII. 1967, 宮ノ浦岳.
9. *Melanotus correctus* CANDÈZE ヒラタクロクシコメツキ
1 ex., 27. VII. 1967, 小杉谷.
10. **Neotrichophorus linteatus* CANDÈZE コヒゲナガコメツキ
1 ex., 26. VII. 1967, 湯泊.
11. *Elater sieboldi* CANDÈZE オオナガコメツキ
1 ex., 26. VII. 1967, 湯泊.
12. *Metaricus viridis crebrepunctatus* NAKANE ミドリヒメコメツキ
1 ex., 28. VII. 1967, 小杉谷.
13. *Silesis musculus* CANDÈZE クチブトコメツキ
3 exs., 27~29. VII. 1967, 小杉谷.
14. *Yukoana carinicollis* LEWIS (?) ヘリムネマメコメツキ (?)
1 ex., 28. VII. 1967, 小杉谷.

以上14種のうち*印を付した3種は屋久島未記録種であった由 同定していただいた岸井尚氏に感謝する。

〔雑甲虫〕

図鑑によって同定したので間違いも多いと思われ、和名のみで示した。和名の後の数字は採集頭数を示し、その後は地名の略号である。略号は次の如くである。

宮	； 宮ノ浦 (0~400m alt.)	21~23	VII.
谷	； 小杉谷 (500~1000m alt.)	27~29	VII.
岳	； 宮ノ浦岳 (1200m 以上)	28.	VII.
平	； 平内	26.	VII.
湯	； 湯泊	26.	VII.
安	； 安房	30.	VII.
小	； 小島	30.	VII.

ハンミョウ科		ベニボタル科	
ハンミョウ	1. 宮.	ホソベニボタル	8. 宮. 谷.
シロスジメダカハンミョウ	1. 宮.	クロハナボタル	4. 宮. 岳.
オサムシ科		コクヌスト科	
エゾカタビロオサムシ	1. 安.	オオコクヌスト	1. 宮.
ゴミムシ科		カッコウムシ科	
ヤクシマチビゴミムシ	5. 岳.	クロサビカッコウ	2. 宮.
ヤクシマナガゴミムシ	1. 岳.	ホソカタムシ科	
クロヘリアトキリゴミムシ	1. 小.	マダラホソカタムシ	3. 宮.
コヨツボシアトキリゴミムシ	2. 小.	ヒサゴホソカタムシ(?)	1. 小.
アトキリゴミムシ 1種	1. 岳.	ゴミムシダマシ科	
モリヒラタゴミムシ 1種	2. 谷.	キマワリ	1. 岳.
ゴモクムシ 1種	1. 安.	ヤクシマナガキマワリ	1. 宮.
クワガタムシ科		シワナガキマワリ	4. 宮.
ネブトクワガタ	1. 谷.	オオクビカクシゴミムシダマシ	6. 小.
ノコギリクワガタ	3. 宮.	ベニモンキノコゴミムシダマシ	1. 岳.
コクワガタ	3. 宮.	ルリスジキマワリモドキ	6. 宮.
コガネムシ科		オオツヤホソゴミムシダマシ	2. 湯.
カブトムシ	1. 安.	ナガニジゴミムシダマシ	3. 安.
オオコフキコガネ	1. 安.	ハネナシセスジキマワリ	10. 宮.
サツマコフキコガネ	1. 安.	ホソクビキマワリ 1種	1. 岳.
イシハラカンショコガネ	1. 平.	カミキリモドキ科	
ドウガネブイブイ	1. 湯.	ズグロカミキリモドキ	4. 安.
アオドウガネ	2. 湯.	ホソアシカミキリモドキ	4. 安. 宮.
マメコガネ	1. 平.	ハイイロカミキリモドキ	3. 安.
ヒメコガネ (?)	2. 平.	カトウカミキリモドキ	1. 谷.
クロアシナガコガネ (?)	2. 谷.	不明種(アイヌ?)	8. 谷.
ヒメトラハナムグリ	2. 谷.	ハムシ科	
ジュウシチホシハナムグリ	2. 谷.	アカガネサルハムシ	1. 宮.
ヤノヒラタハナムグリ	6. 谷.	ルリハムシ	1. 谷.
タマムシ科		アトボシハムシ	1. 宮.
ムツボシタマムシ	1. 宮.	ウスイロサルハムシ	1. 小.
マスダクロホシタマムシ	1. 宮.	キベリヒラタノミハムシ	1. 小.
キンモンナガタマムシ	1. 安.	ミツギリゾウムシ科	
ダンダラチビタマムシ	9. 小.	ミツギリゾウムシ	2. 宮.
ホタル科		ヒゲナガゾウムシ科	
オバボタル	1. 宮.	タイホクフトヒゲナガゾウ	1. 宮.
ジョウカイボン科		フタモンヅツヒゲナガゾウ	1. 宮.
クリイロジョウカイ	3. 谷.	ゾウムシ科	
クシヒゲジョウカイ	1. 岳.	オオゾウ	1. 宮.

クスアナアキゾウムシ	2.	平, 小.	[蝶]	
ワモントゲトゲゾウ	1.	平.	ミヤマカラスアゲハ	1. 谷.
クワゾウ	1.	平.	ジャコウアゲハ	1. 谷.
アトモンヒョウタンゾウ	1.	宮.	ツマベニチョウ	4. 湯.
マツノシラホシゾウ (?)	1.	小.	スミナガシ	1. 宮.
コクロアナアキゾウ (?)	1.	宮.	リュウキュウムラサキ	1. 宮.
ワモンヒョウタンゾウ (?)	1.	湯.	ツマグロヒョウモン	3. 宮.
不明種	7.		ムラサキシジミ	1. 宮.
その他の不明種			アマミウラナミシジミ	5. 宮, 湯, 小.
コメツキダマシ科	4.		ルリシジミ	1. 宮.
アリモドキ科	2.		クロコノマチョウ	2. 湯, 小.
ハネカクシ科	1.		クロセセリ	2. 宮.
キクイムシ科	3.		アオバセセリ	1. 宮.
ヒラタムシ科	1.		[蛾]	
ハナノミ科	1.		オオトモエ	1. 宮.
ケシキスイ科	1.		ナチキシタドクガ	1. 宮.
オオキノコ科	1.		モンシロモドキ	1. 小.
ゲンゴロウ科	13.		ベニイカリモンガ	1. 谷.
所属不明微小甲虫	8.		エダシャク一種	1. 宮.

〔トンボ〕

1. *Rhipidolestes aculeata yakushimensis* ASAHINA ヤクシマトゲオイトンボ
2 ♂ 1 ♀, 22. VII, 宮ノ浦; 1 ♀, 28. VII, 小杉谷.
2. *Stylogomphus ryukyuensis* ASAHINA チビサナエ
1 ♂, 30. VII, 安房; 1 ♀, 26. VII, 湯泊.
3. *Anotogaster sicboldii* SELYS オニヤンマ
1 ♂, 22. VII, 杉ノ浦.
4. *Chlorogomphus brunneus costalis* ASAHINA ミナミヤンマ
1 ♂, 22. VII, 宮ノ浦.
5. *Planaeschna milnei* SELYS ミルンヤンマ
1 ♂ 1 ♀, 28. VII, 小杉谷.
6. *Sympetrum eroticum eroticum* SELYS マユタテアカネ
1 ♂ 1 ♀, 26. VII, 湯泊.

以上 6 種、井上清氏の同定による。

(完)

岡山県産テントウムシの採集記録

山 砥 司 朗

(倉敷市阿知3丁目2-4)

岡山県のテントウムシについては既にかなり多くの報告があるが、最近県下で採集したテントウムシを整理した結果、下記のとおり今迄の報告に見られない新記録種を含めて10種を記録することが出来たので報告しておく。

学名及び同定には原色昆虫大図鑑（北隆館）を用い、又記載中に山砥克己採と記したもの以外はすべて筆者採集のものである。（*は新記録種）

1. *Epilachna vigintioctomaculata* MOTSCHULSKY オオニジュウヤホシテントウ
新見市坂本, 1 ex., 26. VII. 1964, 山砥克己採.
2. *Rodolia limbata* MOTSCHULSKY ベニヘリテントウ
倉敷市帶江, 1 ex., 5. V. 1962.
3. **Hyperaspis japonica* CROTCH フタホシテントウ
倉敷市鶴形山, 1 ex., 12. V. 1963.
4. **Platynaspis lewisii* CROTCH ヨツボンテントウ
新見市井倉, 1 ex., 3. V. 1964; 新見市矢の峰, 1 ex., 3. VIII. 1965.
5. *Chilocorus rubidus* HOPE アカボシテントウ
新見市井倉, 1 ex., 3. V. 1964; 高梁市臥牛山, 1 ex., 5. V. 1965.
6. *Calvia decemguttata* LINNÉ シロトホシテントウ
新見市矢の峰, 1 ex., 26. VII. 1964, 山砥克己採.
7. **Calvia quatuordecimguttata* LINNÉ シロジュウシホシテントウ
高梁市臥牛山, 1 ex., 26. VI. 1966.
8. **Calvia quinquedecimguttata* FABRICIUS シロジュウゴホシテントウ
倉敷市生坂, 1 ex., 25. III. 1962, 松の樹皮下より.
高梁市臥牛山, 1 ex., 2. V. 1965, 花上より.
9. *Anatis halonis* LEWIS ウンモンテントウ
高梁市臥牛山, 1 ex., 26. VI. 1966, 闊葉樹樹上をスウィーピングして得た.
10. *Vibidia duodecimguttata* PODA シロホシテントウ
成羽町羽山, 2 exs., 17. V. 1964, 山砥克己採.
昭和町美袋, 1 ex., 29. IV. 1964. 標本は筆者所蔵

= おとしふみ =

西大寺市内でコウチズズメ *Smerinthus tokyonis* を採集

1967年5月8日、市内河本町にある水源地の水銀燈のついた壁にとまっていた本種1頭を探集しました。本種は全国でも埼玉、大阪、兵庫、愛媛などの各県でしか採集されていない山地性の珍種で今回のように南部の平地で採集されたことは興味深いと思います。

なお、御教示下さった楳本先生に感謝致します。

(木村基樹)

石の下の四年目

—高山蝶の周年経過についての推測—

松野 宏

(鳥取市馬場町25-1)

小学生のなれの果てで、未だに蝶キチガイから脱却出来ない私だが、纏った事など出来る筈もなく、ストレス解消策に時たま採集に出掛ける以外は、机上の知識吸収で満足するだけで、何年か経ってしまった。

しかし、僅かの資料や知識だが、それらを材料に色々の理窟を組立てて自分なりに楽しむものも、結構面白いものである。

何ら実証的裏付けのないシロウトの空想ではあるが、ヒョウタンから駒が出ぬとも限らず、近頃思い付くことなど書いて置こうと言うのが、ここに駄文を草する由縁である。

御存知のように、高山蝶の中には一世代の完了に満2年、足掛け3年を要するものがある。¹⁾ タカネヒカゲの場合で言うと、幼虫時代に2回の冬を高山帯の石の下で過し、3年目の夏にやっと成虫になる。田渕行男氏の表現をお借りすれば、“石の下にも三年”なのである。

この他に、クモマベニヒカゲとタカネキマダラセセリ、北海道のウスバキチョウとダイセツタカネヒカゲが、同様に一世代2年を確認されており、夏の成長し得る期間の短い高山で生活する為の巧妙な適応として興味が深い。

ところで、ここで問題にしたいのも、これら一世代2年の高山蝶についてである。

この仲間は恐らく蝶の中では最も長命だろうが、考えて見ると、ある年に現れた成虫の子孫は1年置きにしか出て来ない訳で、つまり同一場所に発生する蝶でも、偶数年産と奇数年産では系統が違う事になって来る。

もし、採集年の明らかな標本が充分に集められたら、そして斑紋の相違でもあったら、「これはタカネヒカゲの偶数年型です」と言う事になって面白い、などとは以前から考えていたことだが、その内にこれに関して、別の問題があるのに気が付いた。

いま、タカネヒカゲに問題を限って考えて見よう。

この種は地方変異が多く、飛騨山脈北部と南部、それに八ヶ岳から計3亜種が知られているが、⁴⁾ 不思議なのは、上記のように各地にそれぞれ偶数年系と奇数年系がある筈なのに地域ごとに特徴が一定している事である。

つまり、地域的な系統の間では分化しているのに、時間的な別系統では分化していないのだ（ただしこれは私自身が標本を調査した訳では無く、紙上の知識なのだが、ここではこれを前提として話を進めさせて頂く）。

そうすると、奇数年系と偶数年系の蝶は、遺伝的に隔離されているのでは無く、入混っているのだろうか？

セミや甲虫では一世代に数年以上を要する種もあるが、これらは環境や栄養状態によって、例えば5～7年と言うように幅のあるものらしい。⁵⁾ それならば、長年月の間に各系統は入混って行く。

しかし、高山蝶の生活史は、その高度の適応振りから見て、固定化している感じを受ける。この点を少し考えて見よう。

先ず、隔年の二系統が全く分離している可能性を考えて見る。この場合、今ある地方変異を説明するには、二系統に平行変異が起ったとしなくてはならない。

北アメリカのタカネヒカゲの同属で、“ある祖先から、棲息地の岩石の色によって、黒い地質の山では暗色の種に、明るい地肌の山では明色の種に分化した”と説明出来る例があるそうだが、²⁾ 平行的な変異を生じる程、八ヶ岳と飛騨山脈の岩石の色は違っているのだろうか？ しかも、同じ飛騨山脈の中の、常念岳と白馬岳の間でも同様の現象が起ったのだろうか？

どうも、無理な想定だと思う。

こんな考え方もある。現在は二系統に分離しているが、過去には混じる機会があった、つまり各地のタカネヒカゲが亜種に分化した後に、現在の一世代2年の周年経過が確立して二系統になった、とするのである。

これは証明も難しい事だが、やはり納得出来ないものがある。

もしこの通りだとすると、周年経過が固定する時間の方が、色彩・斑紋などの形態的な分化に要する時間よりも短かかった、と言うことになって来る。

南方系の種のように、温度の許す限り一年に何世代でも発生するものと違い、現在のような周年経過を獲得したからこそ、苛酷な高山の環境下で生活出来るのである。

この生態的な進化が、枝葉未節的な（私にはそう思える）翅斑の分化より簡単だったとは、どうしても考え難い。

そうなると、やはり僅かながらでも、隔年の二系統間で遺伝子は交換されているものとしなくてはならないが、どんな形で三年目羽化の周年経過が破られているのだろうか。

タカネヒカゲの生活史を見てみると、7～8月に産卵、2週間位で孵化した幼虫は9月末には3歳になって石の下で越冬、翌年はゆっくり成長を続け、9月に5歳になって二度目の越冬、そしてその翌年には摂食すること無く6月初めに蛹化、7月に成虫が出現、となっている。

終始緩慢な成長振りで、これでは間違って満1年で成虫になる場合は先ずなさそうである。石の下で4年目を迎えるのろまの個体があるものと想像される。

それにしても越冬中の幼虫は、3歳と5歳の大小二つに判然と分れているらしい、この超スローモー個体は、成長が更に遅れて中間の2歳や4歳で越冬するのだろうか。

この点については、私も見当がつかなかったが、近頃は夏の間も休眠を続ける個体があるのではないかと想像している。

その理由は、ツマキチョウの蛹が翌春に羽化せず、そのまま更に一年を過して翌々春羽化する個体がある、との事による。³⁾

キアゲハなどでも同様の事があると言う。アオスジアゲハなどで、夏に生まれた幼虫が第三化ですぐ羽化するのと、蛹のまま翌春まで休眠するのがあるのも同じ性質のものであろう。

この現象が、どんな理由で、どの程度の率で起きるのか分らないが、タカネヒカゲにもこのケースを想定してはどうだろうか。

この場合は幼虫なので考え難い気もするが、注意したいのは、5歳幼虫は越冬後は摂食せず、そのまま蛹化することである。これならば蛹と余り変わらないとも言える。

すなわち、2回目の越冬をした5歳幼虫のうちの幾らかの個体は、春になっても蛹化せず休眠を続け、更にもう一冬越して足掛け4年目に蛹化、続いて羽化する。これによって隔年の2系統は入混じり、地域的な均質性が保たれている——。これが私の推測である。

他の一世代2年性の高山蝶の場合はどうであろうか。最も分布の普遍的なクモマベニヒカゲでも地方的変異が余り知られていないので、タカネヒカゲのような推論は出来ないが同様に両系統は入混っているとして考えて見ることにする。

ウスバキチョウ（越冬態は卵と蛹）とタカネキマダラセセリ（同・3歳と終齢）では、それぞれ蛹と終齢幼虫で2年休眠を仮定すればよい（タカネキマダラセセリも、越冬後の終齢幼虫は摂食しない）。

少し困るのはクモマベニヒカゲだ。この蝶は1年目は卵（中に幼虫は出来ているが孵化はしない）、2年目は4歳幼虫で越冬し、その後も摂食成長する。すると、成長途中の幼虫が一夏の間も休眠を続けるのだろうか。それとも、卵の中で2回越冬するものがあるのだろうか。

こうなると、机上の推論では難しくなって来る。敢えて想像するならば、同属のベニヒカゲのように、その年すぐ孵化して翌年には成虫になってしまう可能性が考えられるのだが——。

以上は、初めにも述べたように、紙上の知識をヒネっただけで、何ら実証的な基礎を持っている訳では無い。

困難ではあっても、現地調査をすれば結論が出るだろうし、私の推測など見当外れであるかも知れない。

しかし、私としては、現地に行くのすら思うに任せず、その一方では“偶数年型”などが見付かったら面白い、と言う野次馬根性も捨て切れず、机上の空論もして見たくなるのである。

註 1) 以下、高山蝶の生活史に関する事項は、田渕行男著「高山蝶」(朋文堂刊、1959)

による。

註 2) Tea Eye : 海外の話題 (23) “タカネヒカゲと他山の石”，
新昆虫, 6 (7), 1953

註 3) 横山光男, 若林守男 : 原色日本蝶類図鑑 (増補改訂版) 保育社, 1965

註 4) 加賀白山にも棲息すると言うが, 詳しいことは知らない。

註 5) しかしアメリカの十七年ゼミと言うのは, 系統ごとにそれぞれ何年目かに正確に現れるものらしい。

= おとしふみ =

備中産甲虫雑記 (2)

4) *Carabus (Euleptocarabus) porrecticollis kansaiensis* NAKANE
ホソアオクロナガオサムシ

1964年5月3日, 新見市井倉野附近を訪れた際, 同行していた楠田雲居君が, ヒメオサムシ *Apotomopterus japonicus* と一緒に採集し 本人はヤコソサのつもりで筆者にくれたものである。

日本昆虫分類図説 (北隆館) により検討した結果,

1. 頭, 前胸, 上翅基部は紫色の弱い光沢を持つ.
2. 前胸背側縁の刺毛は2本.
3. 上翅基部において中央の第1次間室の圧下及びその外側の第2次間室の隆起が明らかである.

の点で, *Carabus porrecticollis* アキタクロナガオサムシと判断した。

さらに本種は subsp. *porrecticollis* BATES と subsp. *kansaiensis* NAKANE の2型に分けられるが, 井倉産のものは上翅側縁前方に刻み目を具え, 近畿中国地方を中心に分布する後者 (ホソアオクロナガオサムシ) に属するものと思われる。

岡山県内では既に吉田郡奥津町小畑と英田郡大原町下庄からそれぞれアキタクロナガオサムシの採集例が報告されているが, 新見市井倉をその新産地として記録しておく。

ちなみに筆者の知るかぎりの県内産オサムシ亞科のものとしては上記の *Carabus porrecticollis* のほか *Campalita chinense* エゾカタピロオサ, *Apotomopterus yaconinus* ヤコソサ, *A. japonicus* ヒメオサ, *Damaster blaptooides* マイマイカブリの計4属5種があげられるが, 他に標本なり文献資料等お持ちの方は本誌上へ発表していただきたいところである。

(山祇司朗)

オオヒラタハナムグリ *Valgus pictus* の新産地

1967年7月5日のことであった。窓ぎわ (吉田郡香北町) で事務をとっていると風にふかれて落ちたかのように小さい虫が机の上にとまった。よく見るとまぎれもなく未発見のハナムグリである。外にはオオバイボタの木が植えられているが他にはない。オオヒラタハナムグリは保育社の原色日本昆蟲図鑑(上)によると山地性でまれであるといわれているのでここに報告しておく。

(竹内幸夫)

Maddester 雜 言 錄 (7)

水 野 弘 造

“私の標本箱から” (その2)

(1) テングアツバ *Latirostrum japonicum* MIYAKE

1 ex., 23. X. 1965, 京都市馬山.

1 ex., 26. X. 1965, 京都府宇治市. (いずれも水野採集)

D君がまだ南米に行く前だったから今から5~6年前の話である。ひょっとしたことからD君は蛾を集めることが病みつきとなり、学問などはそっちのけで毎夜鞍馬山や比叡山へ出かけ、ゴチャゴチャと小さな蛾を（不思議と大きな蛾は少いらしかった）持ち帰っては鼻高々と何が採れたのかにが採れたのと私達に自慢するのであった。しかし残念ながら当時私は蛾などに爪のアカほども興味はなかったし、昔蛾を集めていたM狂士はすでに興味がさめてしまっていて、D君の汗水の結晶をジロリと一べつするや“どれもこれもキタナガばかりだ”と至って冷胆に評する始末であった。従ってD君は一人で黙々とキタナガの採集を続けざるを得なかつたわけだが、ある時“天狗が出た！”とばかりに興奮の色を現わして鞍馬山から帰ってきたことがあった。何のことではないテングアツバというこれ又キタナガが一匹三角紙に収っていたというわけだが、産地と名前のとり合せがよくできていたため、Maddester 連は皆“鞍馬にはテングが居る”ことを知るようになった。

歳月が移ってD君の採蛾熱ウイルスに私も感染し1964年から土曜毎の鞍馬通いを始めるようになった。D君自身は南米遠征でくたびれてもう日本の蛾には大した興味も示さないようであったが土曜日の成果を自慢できる対象としての価値はまだ失っていなかった。エゾヨツメ¹⁾にD君がよだれを流したのに気を良くしてついに冬から夏まで7~8回通ったであろうか。さすがに杉谷岩彦氏以来の名所だけあって、鞍馬の蛾相は豊富で、あれ程熱心だったD君が採り残していた種も時には出てきた。²⁾

しかしどうしたことか私の採集行にはテングが一向に姿を現わさず、D君の鼻は依然として天狗の如く、比良山で採れたフジキオビ³⁾を見せてても篠本峠で採ったキテンシャチホコ⁴⁾を見せてても“まだテングアツバは採れんですか”とニヤニヤあしらわれ、益々その鼻を高める以外の効果は無かったようであった。私がテングを手に入れたのは実に1965年も秋になってからのことだった。不思議にも鞍馬で採集した翌々日私の勤務先の会社の窓に飛来したのがあって、たちまち二匹を標本箱に並べ、D君を完全に圧倒し私が代ってテングになるという寸法なのだが時已に遅く、D君は東京に就職して行ってしまった後だったので、いまだに天狗の鼻は折ることができないでいる。

1) エゾヨツメ *Aglia tau microtau* INOUE

1 ex., 11. IV. 1964, 京都市鞍馬山.

1 ex., 9. V. 1964, 滋賀県比良山. (いずれも水野採集)

2) 例えば ウスベニツマキリアツバ *Tamba gensanalis* LEECH

3 exs., 13. VI. 1964, 京都市鞍馬山. (水野採集)

- 3) フジキオビ *Schistomitra funeralis* BUTLER
 1 ex., 9. V. 1964, 滋賀県比良山.
 (水野採集：これは近畿地方初記録ではないかとの声もある)
- 4) キテンシャチホコ *Odontosia marumoi* INOUE
 2 exs., 5. VII. 1964, 長野県徳本峠. (水野採集)
- (2) オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* LEWIS
 1 ex., 31. VII. 1961, 岐阜県槍平.
 1 ex., 28. VII. 1963, 静岡県二軒小屋.
 1 ex., 7. VIII. 1966, 烏取県大山. (いざれも水野採集)

どうも珍種というものは苦心酸胆しても仲々手に入らぬもので、忘れかけた時分に偶然ころがりこむ傾向がある。私がまだブンブンに多大の興味を感じていた時分は、巨大なオオチャイロハナムグリは何としても自分の手でつまみ上げねば氣の済まぬものの一つであり、かつそれを目的として大山は大神山神社の裏あたりを幾度かさまよったものであった。しかし幸運の女神が微笑むのはずっと後で、オオチャイロなどは半分位はもうどうでもよくなっていた1961年の夏、北アルプスは槍ヶ岳の下り路、蝶一常念一槍の尾根歩きにへとへとになって槍平を新穂高温泉へと急ぐ山道の上に大きなヤマアリ10数匹にたかられてひっくりかえりもぞもぞと断末魔の苦しみを表現している奴をつまみ上げる瞬間まで待たなければならなかった。それは相当な高地での出来事だったので、嬉しさよりも驚きをより大きく感じたものだった。しかしこの種が決して低山地性でないことは二頭目もやはり標高1500m以上の、南アルプスは大井川東側峡谷の某所、次々と飛来するキベリカタビロハナカミキリ^{*)}を己に20頭もとらえたノリウツギの下生えから、入っ子一人居ない峡谷の中では花を訪れるカミキリの羽音すらはっきりと聞き分けられそうなそのじじまを破って豪快な振動音をひびかせながら大きな黒い虫が飛立った。瞬間クワガタかノコギリカミキリと直感したがネットの底からは己におなじみのオオチャイロブンブン（ハナムグリの名は生態上好ましくない）がでてきたのである。その後2年程はこの虫に出会わなかったが（探さないのだから無理もないが）3頭目は念願の大山で、探し始めから数えて実に10年目にお目にかかれたのである。*Necydalis* のみを目的に往復夜行列車日帰りの強行日程で、大山横手道は二の沢あたりのブナ林をさまよったのが昨年8月7日という酷暑の午後、立枯れという立枯れには全て上から下まで目を通したのであるが *Necydalis* の一頭だに見当らず、採れた甲虫が本種只一頭という惨憺たる成績にオオチャイロブンブンの思い出は現在甚だ悪いものになってしまったのは致し方ないところである。

^{*)} キベリカタビロハナカミキリ *Pachyta erebia* BATES
 22 exs., 28. VII. 1963, 静岡県二軒小屋. (水野採集)

- (3) ヒゲシロホソコバネカミキリ *Necydalis odai* HAYASHI
 1 ex., 30. VII. 1958, 岩手県滝ノ上温泉. (水野採集)
- Necydalis* は日本に7種居て（このうち北海道の *pennata* と *ebenina* は同一種とみて6種とする向きもあるらしい）いざれも極めて稀なので一人で全部集めることは至難のことであるが、少くとも天牛屋面をするためには自力で（すなわち交換などを含まない）4

種集めなければならぬというのが京浜同好会の相場だそうで、昨夏中村俊彦氏と四国に採集行を試みた際は、初めから終りまで彼の“*N. odai*！”なるつぶやきを聞かなければならなかった。すなわち京浜にはネキを5種集めた人が居るので、彼としては今まで集めた4種(*solida*, *gigantea*, *harmandi*, *formosana*)に加えて是非ともヒゲシロをやっつけて、トップに追いつかねばならなかったらしいのである。夏の採集行を四国に選んだのも最大の原因は前年ヒゲシロを四国の山中で10数頭も採った人があると聞きこんだからのようであった。さすがにネキ採りの名人がネキを目的に出かけただけあって、剣山では採ってくるわくるわ、私が偶然手にしたクロホソコバネ 2exs., に有頂天になっている間に何とクロホソとオオホソを合せて 14 exs., も採ってきて、私ならば大漁に酔いしれてさっさと下山してしまうところであるが、“*odai* は居ませんよ”と極めて不満顔であった。

彼の如きカミキリスト(?)が、カミキリのコレクションは貴い物を含めても 200余種程度だった私などと親交を持つようになつたのも、おそらくは私の標本箱には私自身の採集した *N. odai* があったからに他ならない。

而して私のヒゲシロホソコバネには忘れぬ思い出がある。あれは昭和33年、他のMaddester 2人と共に東北地方は青森、秋田、岩手三県にまたがる十和田八幡平国立公園縦走を行ったときのことだ、北海道まで渡るにはどうしても予算の足りない3人は、それならばなるべく未開の所へと選んだ旅程だった。ところが私としては生れて初めての山らしい山だった上に折からの台風の余波で、十和田では3日間閉じこめられるし、八幡平頂上でも無為に山小屋の一日を過した後雨中決行という採集家としては忍び難い試練に体力的にも精神的にも参ってしまい、山道のドロンコと戦いながら三石山を瀬ノ上温泉へと下り、さてこれから最後の乳頭山登頂だぞという時であった。たぶん疲労で方向感覚が完全にマヒしたのであろう、川添いの道が突然笹藪の中で消失したのである、身の丈を余る笹にはおをはじかれながら30分も奮斗したが道は見つからず、結局引返しと言うことになり再度やぶこぎに体力を消しているその目の前を飛びすぎようとした一匹の虫を見つけた。反射的に掌で叩き落したのが何とヒゲシロだったという次第。しかし珍虫に感激している暇などは全くなかった。何しろ天気のあやしい山中で道を見失って人影は全くなく、しかも次の宿泊予定地まで時間は恐ろしくかかる地点に相違ないのである。毒瓶に放り込んだカミキリのことなどついに夜遅くテント地にたどりつくまで忘れてしまったし、テントの中では虫の整理をするよりも早く疲労が体をおおって睡り落ち、ついに東京に帰るまで毒瓶を開かなかつたため、毒瓶の中のヒゲシロはあわれにも、充分なる上下左右振動と殺虫液剤の洗礼に浴したとみて、トレードマークの触角白色部は黒変し、片方の触角は今にも落ちなんとするところを辛うじてもちこたえている状態になってしまった。珍種を採った時の気分の良さは誰しも忘れ得ぬものであるが、私の場合ヒゲシロに関するかぎり、たとえそれがオオトラに匹敵する珍品であると言われようとも、しかもあの東北旅行での唯一無二の収穫らしい収穫だったのは事実としても、思い出の甚だ愉快ならざるカミキリの一つなのである。

* クロホソコバネカミキリ *Necydalis harmandi* Pic

2 exs., 25. VII. 1966, 徳島県剣山. (水野採集)

医療法人

重井病院

倉敷市幸町 TEL (22) 3655

すずむし Vol. 17, No. 2, April 30, 1968

倉敷昆虫同好会発行

連絡事務所 倉敷市幸町（倉敷昆虫館内）
本部（倉敷市住吉町岡山大学大原農業生物研究所内）